

## 外部性によってマレーシア性を高める華人映画

——ホー・ユーハン『レインドッグ』が見せる世界——

篠崎香織

毎年 10 月頃に開催される東京国際映画祭には、世界中の作品が集い、マレーシアやインドネシアの作品もしばしば上映されてきた。第 22 回を迎えた今年(10 月 17 日～25 日開催)も、マレーシア映画が上映された。本映画祭では近年マレーシア映画の評判が高く、第 18 回(2005 年)ではヤスミン・アフマド監督作品『細い目 (Sepet)』が最優秀アジア映画賞を受賞した。

だが、常に本映画祭に色を添えてきたヤスミン監督は今年 7 月に急逝した。今年の映画祭では、同監督をしのいで「追悼ヤスミン・アフマド」が企画され、『タレントタイム』+『ヤスミン CM 作品集』と『ムアラフ——改心』が上映された。

ヤスミン監督は作品を通じて、人類は様々な言語、文化、宗教に分かれており、その間で対立が生じたり、異なる背景を持つ個人どうしの関係が引き裂かれたりするようなことがあるが、言語や文化、宗教の多様性こそが人類社会を彩るものであること、またそれぞれの社会には、伝わり方は異なるけれど、他の社会と共通し共有しうる普遍的な価値が存在し、それを互いに理解し認識していれば、異なる背景を持つ人どうしが関係を築くことも困難なことではないことを、一貫して訴えてきた。最後の作品となった『タレントタイム』も、そして 2007 年に制作されながら、マレーシアでは上映許可がなかなか下りず、ヤスミン監督の粘り強い交渉によってついに今年のクリスマスにマレーシアで封切られることになった『ムアラフ』も、そうしたメッセージに溢れ、愛に溢れた映画となっている。

ヤスミン監督の作品の魅力については、同監督が亡くなった次の日に、JAMS のウェブサイトでも山本博之会員が「マレーシアの枠を超えたヤスミン作品の魅力」を寄稿しており、こちらを参照されたい(会報今号に掲載)。本稿では、民族ごとの境界線が明確に引かれ、民族間の関係が希薄であると、マレーシア人自身によっても、また外部の観察者によってもとらえられてきたマレーシアから、文化や言語、宗教が異なっても様々な形の愛を醸成できるのだという強い信念を、マレーシア人のみならず、人類一般に訴える作品が生れ、そのメッセージをマレーシア社会も受け入れつつあることを、この機会に記しておきたい。

なお、『タレントタイム』は第 19 回アジアフォーカス・福岡国際映画祭(9 月 18 日～27 日開催)でも上映された。これらの映画祭のおかげで、マレーシアに行かずともマレーシアの映画を見ることができ、しかも日本語字幕があることにより、映画の世界により深く浸れるというのは、非常に幸せなことであると思う。

\*

今回の東京国際映画祭ではもう 1 人、マレーシア人監督の作品が上映された。ホー・ユーハン監督の『レインドッグ (Rain Dogs / 太陽雨)』(2006 年作品)と『心の魔 (At the End of Daybreak / 心魔)』(2009 年作品)である。以下では『レインドッグ』を中心に、ホー監督について紹介したい。

ホー監督は、1971 年生れで、プタリンジャヤ出身。アイオワ州立大学工学科を卒業した後、マレ

ーシアに帰国し、エンジニアとして働いていたが、その仕事を辞め、かねてから夢見ていた映画制作を実現すべく、広告・テレビ制作に転職し、映像業界に入った。ヤスミン監督が元々は広告制作者として有名であったように、マレーシアでは広告制作から映画制作に転身する人が多く、また映画制作者となった後でも広告制作を手掛ける人が多いという。

ホー監督は、自身の作品をマレーシア映画として位置付けている。ヤスミン監督の映画では、マレー語、英語、タミル語、華語、広東語など、マレーシアで日常的に使われている様々な言語で登場人物たちがやりとりする。これに対してホー監督の作品では、ほぼ広東語及び華語のみで登場人物たちのやりとりが展開していく。マレーシアでは、相手や場によって使用する言語を切り替える多言語的状況がある。他方で、ある場や関係性においては、特定の言語のみが使用され、それ以外の言語がほとんど使用されない状況もある。いずれもマレーシア社会の一側面であることには変わりなく、ホー監督は後者の側面を切り取ることでマレーシアを描こうとする。

『レインドッグ』の舞台は現代マレーシアで、中等教育修了試験を終え、その結果を待つ休みの間にトンという華人少年が経験した成長物語である。トンの家は父親不在である。父親はトンが生まれる前に亡くなり、家族は母親と兄のホンである。だがホンはクアラルンプールで働いており、実家にはほとんど戻らない。

トンは常に庇護者を求めている。本当は母が庇護者であって欲しいと思っているのだが、このところ母親には足しげく通う男がいる。母親は庇護者としての役割を放棄していないが、トンは母親が

自分の求める庇護者ではないと感じる。

その中でトンが頼りとしたのは、兄のホンであった。ホンはトンの期待に応えようとする。トンに実家に戻るよう乞われ、それは受け入れずとも、母とトンをクアラルンプールに呼び寄せることを考え、3人で住める家を探す。また実家に戻るトンに 1000リンギを持たせ、母親に渡すよう申しつける。

他方でホンは、賭けビリヤードで生計を立てている。普段は持ち歩かないが、家にはジャックナイフを所有しており、身を守るためにそうした物が時には必要である場に身を置いていることをうかがわせる。だがホンがそのような状況に身を置くようになったのは、彼が正義感に溢れた人間だからであった。ホンは元々工場で働いていたが、同僚に対する上司の待遇に憤り、上司を殴って仕事を辞めている。ホンには身の丈以上のがんばりをして、自分の身の回りの人を支えようとする側面があった。

そんなホンは、突然死んでしまう。関係のない諍いに巻き込まれ、命を落とす。その犯人に制裁を与えるのは、公権力ではなく、ホンの仕事仲間であり友人であるホックという男である。ホックのセリフには、警察が事件に十分に対処しなかったことが示唆される。

ホー監督の作品では、マレーシアにおいて非合法な世界で生きる華人や、非合法な世界に足を踏み外してしまった華人が描かれ、その理由が提示される。『レインドッグ』では、公正を求め、その中で自らの身を自らで守らざるを得なくなってしまうことが、理由として提示されている。

これに関して、ホー監督の『心の魔』でも非合法な闇のなかに入り込んで行く人物が描かれるが、その理由は『レインドッグ』とは対照的で、これといった道義的な背景が存在しない。相手が自分の期

待する行動を取ってくれない状況が続く中で、ボタンが1つ1つかけ違えられていき、気づいたらあちら側に行っていたという世界が描かれる。

トンの成長物語に話を戻そう。兄を失ったトンは、母とクアラルンプールを訪ね、その旅の中で父の話を聞く。その話は、母と自分との絆をも強めてくれるものであった。トンは故郷に戻り、母と2人で家族をやっ払いこうとする。だが、兄が残り、トンが譲り受けたバイクを、母親のところに通う男が奪ってしまう。トンは男を問い詰めるが、母は男をかばってしまう。バイクを奪われたことは自由を奪われたことに匹敵し、庇護者を完全に失ったトンは家を飛び出し、母方のおじの家身を寄せる。

トンは自立しようと周りの大人を真似るが、うまくいかない。その中で、自分を守ってくれる完全な庇護者は存在しないが、自分が多くの人に支えられて生きていること、また自分も完全な庇護者になりえないが、自分の身の丈に合った形で、自分の身の回りの人を支えられるのだということに気づく。トンは、完全なる庇護者を求めるのをやめることができ、それによって家に戻ることができた。あるいはトンにとって家族は、自分の手で作っていくものなのかもしれない。

\*

ホー監督の作品は、劇中の言語と、マレーシアの枠に留まらない形で助成やスポンサーを得ていることにより、時として「マレーシア映画」として受け取られないことがある。

『レインドッグ』は、オランダの Hubert Bals Foundation より助成を得るとともに、香港映画界から制作資金を得た。2005年3月に、香港の世界的大スターのアンディ・ラウ(劉德華)が所有するフォーカス・フィルム(映藝娛樂有限公司: Focus

Films Limited )と Star Chinese Movies Network が、「FOCUS: First Cuts(亜洲新星導)」プロジェクトを開始し、シンガポール、香港、マレーシア、中国、台湾の若手映画制作者に映画制作資金を出資した。『レインドッグ』はその1つであった。

2006年のベニス映画祭では、香港映画が紹介される中で『レインドッグ』も紹介されたという。ホー監督は、自分はれっきとしたマレーシア人なのに、資金を提供してくれた香港に謝辞を述べざるを得ず、奇妙な思いをしたと後に述べている。また、『レインドッグ』は日本でも、マレーシア映画というよりアンディ・ラウのプロジェクトの一作品として紹介されている。

ホー監督が一貫して関心を持つのは、マレーシア社会であり、マレーシアの華人社会である。だが、ホー監督はマレーシア以外から制作資金を得ることを常に意識しており、スポンサーを引き込みうる要素を映画に盛り込むような試みも行っている。その結果、非マレーシア的な要素が、マレーシア社会の現実を成り立たせる要素として描かれているように見えてしまうこともある。

このことは、マレーシアの外にも基盤を求めることで、マレーシアで成功しようとするトランスナショナルな華人の1つの姿とも言えよう。多様なマレーシアを見つめる上で、ホー監督の作品は、興味深い世界を見せてくれることだろう。